

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



万作は槓子と別れ、その足で三越へ行った。

ところが静江は現れない。昼食時の混み合うレストランの隅で、なお三十分ほど辛抱強く待ったが、静江は姿をみせなかった。どうやら事態がすっかり変わってしまったようであった。それもたぶん、静江の方へ好転したに違いなく、わざわざこんなところで亭主の友人に会う必要もなくなったのだろう。このレストランでは、静江の方から予定変更の連絡もできない。万作はかど庵に電話を入れ、その辺のところを確かめたい気持ちにもなったが、気分が収まるのを待つて三越を出た。

県立図書館の窓際のいつもの席で本を読み、活字に疲れてぼんやり窓の外に目を移した。四時に少し前だった。路面電車がゆられて道後に帰る。

うつむきかげんに上人坂を上がっていると、上で「おい」と人を呼ぶ声があった。アパートのところまで来て、それとなく坂の上を見ると、倉田が手をつけていた。アパートをやり過ぎし、万作が坂を上がり切ると、宝蔵寺の楼門へ続く石段で倉田が待っていた。二人は何となく坂道を見下ろした。

江戸時代まで、宝蔵寺のある道後奥谷の一带には、本堂と奥の院、鐘楼門、観音堂、それに坂の両側に十二の塔頭があったが、明治に入って一気に衰退し、坂道の両側には遊女屋が軒を並べるようになった。明治二十八年十月、道後の湯を楽しんだ正岡子規と夏目漱石は、連れ立って宝蔵寺へ参詣している。この頃、境内へ至る坂の周辺は花街となっており、子規は宝蔵寺の山門に腰をうちかけ、「色町や十歩はなれて秋の風」と詠んでいる。

一遍は坂の途中にあったといわれる河野氏の館で生まれたとされている。

境内へ入ると、万作と倉田はベンチに並んで腰をおろした。

二人は暮れなずむ空を眺めていた。遠く、軟式テニスの打球音がしている。

ついさっきまでの、と倉田が重い口をひらいた。静江としみじみ話していたのだという。

(やはりそうだったか)

聞かずとも結果はわかっていたが、万作は倉田のいうことに耳を傾けた。

みね子と一緒に倉田は東北の温泉地に一週間ほど逗留していた。みね子がどうしても泊まってみたいホテルがあるとねだねるので、東京へ出てその豪華なホテルに一泊し、今朝一番の飛行機で松山へ帰ってきた。ところが、空港からタクシーでマンションへ戻ると白のベンツがとまっていたのである。

引き返し、同じタクシーで市内を一周して、もう一度マンションへ行った。ベンツは同じところに停まっている。タクシーを降り、少し離れた喫茶店で倉田はみね子と共に、マンションから静江が去るのを待った。

そしてベンツの去るのを見届け、マンションのみね子の部屋にもどった。静江がみね子の部屋に入った形跡はなかった。管理人に事情をいったにしても警

察でも立ちあわなければ、室内には入れないはずである。たぶん、静江はドアの前にずっと立ち、二人が帰るのを待っていたのであろう。

みね子はベッドに身を投げ出し、堪えきれずに泣きだしていた。みね子の気持ちがおさまるのを待って、昼前に倉田はかど庵に帰った。

静江の目がすわっていた。

それから、夫婦の間で修羅場があったにちがいない。倉田はその結末だけを知った。

「子は、なかったことになる」

かれは仁丹を一粒一粒、口へふくみはじめた。

「そうか、そうするのか」

と万作は自分を納得させるようにいった。

懐妊をあれだけ喜んでいた倉田が、がらっと変わってしまったことは驚きであった。静江が愛人の妊娠を知ったのだろうか。

「静江さんは、子どものことは知らんのだな？」

倉田は頷き、いった。

「子どもが欲しいのはわしだけやない。一番不憫なんは子供を産めん女やないか。子どもがおらんのをええことに、わしはさんざん遊ばしてもろた。その間、静江がどんな気持ちでいたか、今日、マンションから出ていく姿を見てつくづく思い知らされた。わしかて、あと何年生きられたもんか、わかりやせん。わしの骨を拾うのは、静江しかおらん。そやからこれからは、罪滅ぼしせんといかんわい」

まったく虫のいい話である。

ふりかえれば何年か前にも、万作は倉田の口から同じようなことを聞いた覚えがある。しかし当の倉田はひどく真面目くさった顔で、寺の本堂を見つめていた。

本堂には一遍上人の木像がある。倉田と松寿会を組織したころは二人で毎日のように拝観したものである。

「みねちゃんは、どうする？」

東北への温泉旅行は懐妊の祝いと、みね子の身体をいたわることが目的だったはずである。

「因果を含めて、ように話す。三年も一緒に暮らした仲やないか。あの子はわしの気持ちをちゃんとわかっるとる」

と倉田は勝手に樂觀している。

「そうか……」

万作は口ごもった。

昔、山の学校で同僚の二人の女性教師がある青年をめぐる三角関係のはてに刃傷沙汰になり、一方の女が恋敵の髪をばっさり切りとる事件があったことを思い出さずにはおれなかった。

あの時の加害者の女もふだん、みね子のようにおとなしい人だった。万作は話題を変えた。

弓島への取材旅行の結果や、昨日のシンポジウム準備会での川瀬の自信たっぷりな様子、それに今度、栗原槇子と窪野へ行く約束ができたことを話した。

倉田は槇子が自ら名乗りでたことに興味が湧いたらしく、自分もよければ今度調査に参加したいと申し出た。ひよっとして、川瀬の鼻をあかすような発見があるかもしれないぞ、と倉田は商人らしい打算を口にし、のっそり腰をあげる。と本堂へ歩み寄った。

合掌のあと、

「やっぱし、一遍さんはえらいの」

倉田は感に堪えない声を出した。

深夜、万作は槇子がくれた燭台を掌てにしてみた。

燭台の丸い壁には、流線模様の細長い窓がいくつもはいつている。ローソクを立て、机上において火をともしす。

室内の明かりを落とすと、燭台は萌黄色よせいせきの光彩につつまれ、闇の中に浮かびあがった。

万作はあつと息を息をのんだ。

燃えたつような光線が槇子の眼差しとかさなっていた。